
鯉王の躍動

CROW

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鯉王の躍動

【Nコード】

N2708Y

【作者名】

CROW

【あらすじ】

町で最も弱いポケモントレーナーと
最弱と評されるあのポケモンが織り成す
ちょっと熱い物語。

ここには語られることのない伝説がある…。

プロローグ（前書き）

久しぶりに執筆してみました。文章におかしいところや変なところが無い様に

留意しているつもりですが、何かありましたらご指摘いただけると幸いです。

それよりも問題なのは、ちゃんと連載できるかという面か…。

ブローグ

それは、テッカニンの声が騒がしい夏の日のことだった。

僕は今日も一人外へと出かけ、近所の子供たちが行っているポケモンバトルを見に行った。いつもの広場に到着すると、

辺りの空気が張り詰めているのを感じた。そこには子供同士のお遊びの様な生易しい空間は広がってはいない。

ただ、勝負の世界が広がっているだけだ。

僕が広場にやってきたこと気が付いたのか、誰かがこちらへと近づいてきた。

「お、タケル来たか」

そう僕を呼んだのはこの町のカキ大将のケンタ。

この辺では、クチバのケンちゃんとして僕達から一目置かれる存在だ。

ガキ大将と言うと悪いイメージがあるかもしれない。

だけどケンちゃんはとてもいいやつだ。

他人に暴力をふるったり、威張り散らしたりしない。いじめなんて以ての外、

見つけたら許さない。とにかく正義感が強い少年だ。

「そついや、まだお前ってポケモンを持ってないのか」

「うん、まだ」

「そろそろ親にモンスターボールの一つぐらい買ってもらえよ。」

いつも、見るだけじゃあ詰まらないだろ？」

「まあ、そうだけど…」

僕はポケモンを持つてはいなかった。それには少し訳がある。

僕の母親は近所にあるポケモンだいすきクラブに所属していてポケモン同士を

戦わせることを嫌っていた。ポケモンは可愛がる生き物だと主張して僕にポケモンを渡すことに賛成していないのだ。もし僕にポケモン

を渡したならば

必ずやポケモンを戦わせてしまふ。そんな懸念事項がある限り、母親が

ポケモンを持たせることに賛成することはない。

まるでどこかの団体がホエルコやホエルオーは見るものであつて、戦わせるものではないと訴える様に。

そうなつてくると頼れるのは父だけだが

父の説得も母の耳には届かないらしい。

僕がポケモントレーナーになるといふ道はこの障壁を

乗り越えなければ達成できないのだ。

「ポケモンだいすきクラブだか何だか知らねえけど、ポケモンは可愛がるものだ！

なんてそんな女々しいことだけをやってられるか！バトル、流れ出る汗。

そしてトレーナー同士の友情。それがポケモントレーナーの生き方つてもんだろ！

そして、そうすることで初めてポケモンに愛着が湧いて可愛がることができるんだ！　なあ、そうだらタケル！」

突然、ケンちゃんがポケモンについて力説し始める。僕はその勢いに押され

ただただ頷くことしかできなかった。

「ケンちゃん。とつとバトルの続きをやらうぜ！　俺達、待ちくたびれたぜ」

広場の仲間たちが退屈そうにそう漏らす。そういえば、今はポケモンバトルの真っ最中だった。

「おお、悪い悪い。今行くぜ。まあ、タケル。

お前がポケモンを持てるようになったらバトルしような」

ケンちゃんは僕にそう言つと、広場の仲間たちのところへ戻つていった。

”ポケモンを持てるようになったらバトルしような”このセリフを

聞くのも何度目だろうか。

ポケモンを持てるようになったら、その条件が満たされるのはいつの日なのか。

僕がここで彼らと熱いバトルを展開できる時が来るのか。

そんな不確定な暗い感情は広場の仲間たちの白熱したバトルによって何処かへと消えた。

いつの間にか自分もその仲間の中に混じって、

時間が経つのも忘れて一緒に盛り上がった。

気が付くと空は真っ赤に染まっていた。夕方になっていたのだ。

「もう夕方か。お前ら解散するぞ」

「えー！？もう解散？もう少しバトルしようぜ」

「あのなあ、夕方には帰るのが決まりだろ。ほら撤収撤収」

「ケンちゃん早くお母さんに会いたいんだよ。だからこうして早く解散するんだよ」

「やーい！マザコンのケンちゃん！」

「何だと。もう一回言ってみろ！」

そんなやり取りを聞いていた僕は思わず笑ってしまった。

「何だよ。タケル。お前まで俺のことを笑うのか」

「いや、そうじゃないよ。ただ、何かこうして皆でいるのって楽しくてさ」

自分でも臭いセリフなんじゃないかと思った。けれど、皆の心を温かくさせたことに

違いはなかった。僕は広場の仲間やケンちゃん達にサヨナラをする
と家路についた。

夕方だというのにまだテッカニンが五月蠅く鳴いている。
それもととても楽しそうに。

プロローグ（後書き）

ガキ大将のニュアンスがややおかしいかもしれない。

一目置かれていると言われている割にはケンちゃんは結構仲間たちにからかわれているいる様子。

まあ、皆のまとめ役という人物とでも思っていてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2708y/>

鯉王の躍動

2011年11月6日05時23分発行